関西自然保護機構会報 *20*（*2*）：*77−81, 1998*

原　著

岐阜県に生息するヌートリア（*Myocastor coypus*）の分布の変遷

京都大学理学部動物生態学研究室　岡　田　　篤
京都大学理学部動物生態学研究室　立　澤　史　郎
京都大学理学部動物生態学研究室　村　上　興　正

CHANGES IN DISTRIBUTION OF NUTRIA (*Myocastor coypus*) IN GIFU PREFECTURE

Atsushi Okada　*Laboratory of Animal Ecology, Faculty of Science, Kyoto University*
Shirow Tatsuzawa　*Laboratory of Animal Ecology, Faculty of Science, Kyoto University*
Okimasa Murakami　*Laboratory of Animal Ecology, Faculty of Science, Kyoto University*

はじめに

ヌートリアは水辺に生息する草食性の大型げっ歯類であり，その原産地は南米南部の諸国；ボリビア，ブラジル南部，パラグアイ，ウルグアイ，アルゼンチン，チリ中南部（Osgood, 1943）である。本種は飼育しやすく毛皮が良質であったため北アメリカ，ヨーロッパ，ロシア，中東，アフリカ，日本に導入され，現在その多くの地域で野生化している（Gosling and Baker, 1991）。アメリカ合衆国やイギリスなどでは個体数が著しく増加し，野菜などの農作物や在来の植物に対する食害，水辺の堤防を破壊する等，人間社会へ害をもたらすようになった（Laurie, 1946; Willner *et al.*, 1979; Gosling and Baker, 1991）。これに対してイギリスでは1962年から政府および民間主導で組織立った駆除が行われ，1989年頃を境に，絶滅したと考えられている（Gosling, 1989; Gosling and Baker, 1991）。

現在，日本では西日本を中心に帰化・定着している。これらは第二次大戦前後に飼育されていた個体が放逐された，あるいは逃げ出して，繁殖したものと考えらている。野生化したヌートリアは水田や水辺の農作物に害を与えるようになったため，1963年に狩猟獣に指定された。最初の10年間（1963〜1972年）の捕獲頭数は年間1,000頭前後であったが，それ以後徐々に増加し，最近10年間（1986〜1995年）では年間3,000〜4,000頭捕獲されている（なお上記の捕獲頭数は有害鳥獣駆除（以下「駆除」とする）による捕獲と狩猟者登録を受けた者による捕獲との合計。前者は実際に捕獲が行われた地域での捕獲として記録されるが，後者は狩猟者が登録を受けた都道府県および市町村での捕獲として記録されることに注意）。

ヌートリアが狩猟獣に指定されてからほぼ20年間は京都府，兵庫県，岡山県，広島県など一部の府県でのみ駆除が行われていたが，それ以後新たに岐阜県，愛知県，三重県，鳥取県，島根県でも駆除されるようになった。これらのことから，本種の分布域が拡大していることが示唆される。

岐阜県で駆除が初めて行われたのは1982年と比較的最近になってからであるが，駆除頭数は短期間で増加し，特に最近5年間（1991〜1995年）では日本全土における駆除頭数のうち21.4%を占めるようになった（1991〜1995年の5年間の全国における駆除頭数8,317のうち岐阜県では1,783頭で21.4%，岡山県では5,378頭で64.7%；表1参照）。駆除頭数が必ずしも個体数を反映す

関西自然保護機構業績　第211号，関西自然保護機構研究助成　№50

表1　有害鳥獣駆除による捕獲頭数の推移.

都道府県名	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995
岐阜県	5	105	34	116	106	110	102	250	159	401	376	417	181	405
愛知県			5	4	27	23	40	25	149	73	103	127	60	43
三重県								2				9		
京都府	17	32	19	3	23	31	17	32	31	28	24	11	26	8
兵庫県		16	33	8	90	58	99	48	77	61	42	23	66	103
鳥取県									3	9	10	22	18	64
島根県											14	47	61	45
岡山県	719	1036	1302	1749	2228	1342	1273	1801	1343	1074	1551	1359	1394	
広島県	7	7	2	1		2		1	5	9		5	30	18
合計	748	1196	1395	1881	2474	1566	1531	2159	1767	1655	2120	2020	1836	686

るわけではないが，おそらく岐阜県ではヌートリアの個体数が最近増加したものと思われる。

移入種の帰化・定着，分布拡大の条件や過程の分析は，生態学的にも重要な問題であるが，このような分析を行うためには分布の変遷を把握する必要がある。日本に生息するヌートリアに関して，そのような研究は，岡山県におけるアンケートと狩猟統計による分布調査（三浦，1976）の1例のみである。そこで，岐阜県への移入の経緯や分布の変遷を明らかにするためにアンケート調査をおこなった。

本研究を進めるに当たり，岐阜県自然環境保全課の間宮裕二氏，岐阜県各県事務所林務課鳥獣担当の方々，岐阜県猟友会の事務局長の田中一好氏には貴重な資料と御協力を頂いた。また，京都大学理学部動物生態学研究室の方々に原稿の校閲と貴重な御助言を頂いた。同研究室の文部技官堀清子さんにはアンケートの事務的処理の件で多大な御協力を頂いた。あわせて感謝の意を表する。最後に，アンケート調査に心よく御協力を頂いた方々に厚く御礼を申し上げる。

また，本研究には関西自然保護機構の1997年度研究助成および1997年度全労済環境問題研究助成の支援を頂いた。あわせて感謝の意を表する。

調査方法

アンケートは岐阜県猟友会各支部の会長に対して行った。回答があった場合は，さらに県下に在住する猟友会会員等を紹介して頂いて，それらの方々にもアンケートの回答を依頼した。

アンケートは回答者が在住する，あるいは詳しく知っている岐阜県の各市町村について行った。内容は下記の通りである。

1. 現在，ヌートリアが生息しているかどうか－はい・いいえ・不明，のうちから選択
2. 生息場所－地名あるいは河川名について記入
3. 初めて出現した時期－今年・去年・2年前・3～10年前・10年以上前（ただし終戦からは10年以上経過）・終戦～その後10年の間・戦時中・戦前，のうちから選択
4. 過去の飼育状況－場所・期間・頭数・購入元・その処理法，について記入

実施期間は1997年7月～10月で，回答率は74.7%（56/75）であった。

結　果

各市町村においてヌートリアが出現した時期およびかつての飼育地の分布を図1に示した。なお，出現した時期に関しては，一つの市町村に対して

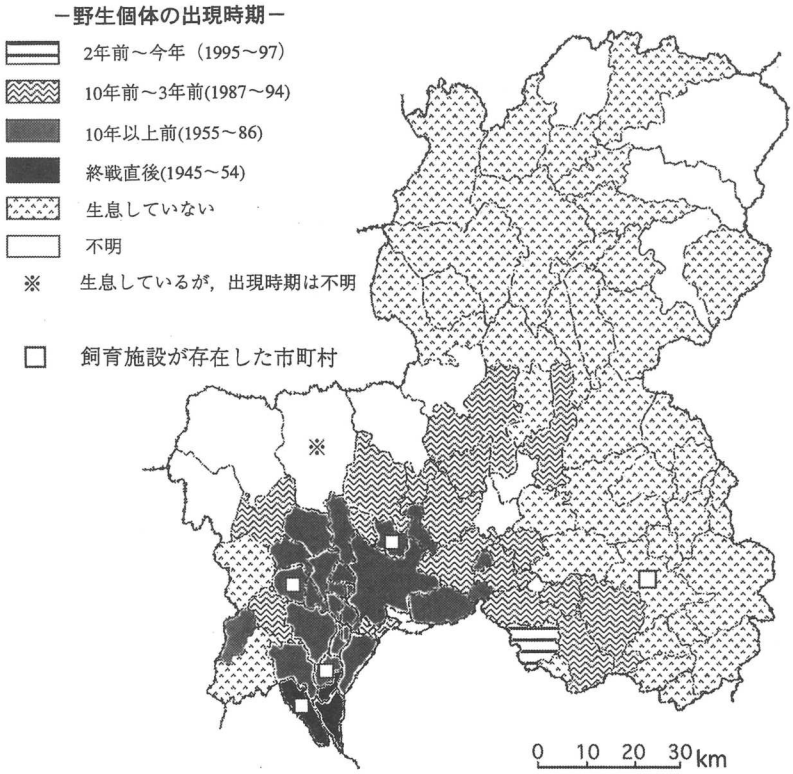


図1 ヌートリアの分布の変遷.

複数の異なる回答があった場合，まず在住者の回答を優先し採用した。それでも回答が一つに決まらない場合は，一番多い回答を優先し採用した。

この図から，揖斐・長良・木曽３河川が合流する県西南部（海津町，南濃町，平田町；図1，2，3を参照）では終戦直後からヌートリアの生息が確認されており，年とともにその分布域が北部と東部に拡大していることがわかる。ヌートリアのハビタットは水辺に限られるので，この３水系（河川）沿いに分布域が徐々に広がったと考えられる。土岐川水系（図１の多治見市，土岐市を参照）においても比較的最近ヌートリアが確認されている（ただしこの水系への侵入経緯や分布の変遷を知るためには愛知県における分布の変遷を調べる必要があるだろう）。ほとんどが山岳・山地で占められている北部や東部には現在のところ生息は確



図2 岐阜県の行政区分.

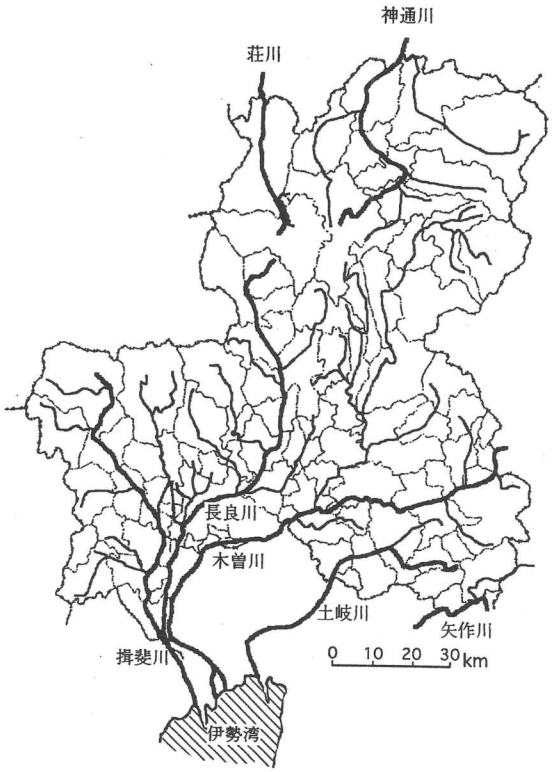


図3 岐阜県の河川.

認されていない。

今回の調査では合計5ケ所の飼育地を確認したが，詳細な回答は1例のみ（高富町）であった。飼育期間はいずれも戦時中から戦後8年（1953年）までであった。ここで，終戦直後（1945～1954年）にヌートリアが出現した地域以外の市町村においても飼育施設があったことに注目したい。また，「飼育されていたという話を聞くが詳細不明」という回答が別に数例あることなどから，飼育施設の実数はさらに多く，岐阜県内にある程度広範囲に分布していたものと思われる。

考　察

揖斐・長良・木曽3河川が合流する県西南部は沼や池が多く，川も網目状に存在するので岐阜県下ではヌートリアの生息場所として好適な環境であるといえる。そこで，次のような推定ができるのではないだろうか：飼育されていたヌートリアは戦後間もなく各地で野外に放逐されたか逃げ出したが，条件の良かった県西南部の個体群のみ定着に成功した。この個体群は，その後，揖斐・長良・木曽3河川に沿って徐々に分布域を拡大していった。ただし，気温や植生などの環境条件が悪い県北部や東部の山岳・山地地帯までは分布域は広がっていない。ただし，定着初期のシナリオを確実に把握するためには県西南部に隣接する三重県，愛知県においても同様の調査をする必要があるだろう。

県北部や東部の環境条件を考えると，分布域が今後，大きく拡大することはないと思われる。また，ヌートリアは土手に生える草を主食とし，そこに穴を掘って休息するため，河川改修（特にコンクリート3面張り）が進むにつれて生息場所が失われていく。以上のことから，今後岐阜県において個体数が飛躍的に増加するとは考えにくい。実際に，県西南部の海津町や平田町では，水害対策のために河川改修が進んだ昭和60年頃を境にヌートリアを見る機会が減ったという回答もあった。

岡山県においてもヌートリアにとって非常に環境条件が良く，分布拡大の起点となる地域が存在することが示唆されている（三浦, 1976）。ただし，岡山県の場合には，その地域以外においてもある程度初期定着に成功している点で岐阜県のケースと異なる。

ヌートリアが商用に飼育されていた期間は岡山，岐阜県ともに戦時中からその後10年の間で，野生化したのもほぼ同時期と考えられる。しかし，岡山県では1973年までに分布域が県内ほぼ全域に拡がった（図4；三浦, 1976）のに対して，岐

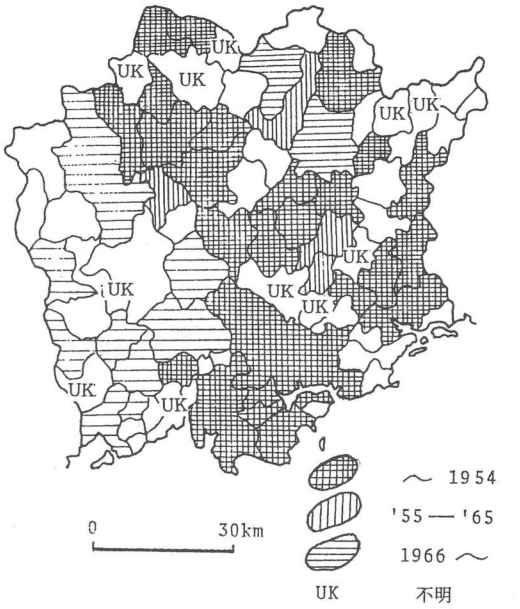


図4　1940年から1973年の間に岡山県の各市町村において野生のヌートリアが最初に確認された年代（三浦，1976）.

阜県では1987年（10年前）以降も分布域が拡大し続けている（図1；スケールに注意）。また，岡山県では駆除は1960年頃から開始されているのに対して，岐阜県では1982年と遅い。これらの相違点から，2つの県に生息する個体群において分布域拡大の過程および個体数増加の過程が異なることが示唆される。これは環境条件の違い，ヌートリアの初期密度および初期分布の違い等の様々な理由が考えられるが，移入種の帰化・定着や分布拡大の条件や過程を考える上で非常に興味深い。

しかしながら，そのような条件や過程を解析するためには野外調査を行い，生息場所条件，社会構造や生活史などの生態学的特性を明らかにする必要があるだろう。

引用文献

Gosling, L. M. 1989. Extinction to order. New Scientist. 121: 44-49.

————. & Baker, S. J. 1991. Coypu Chapter. In: Handbook of British Mammals: 267-275. 3rd edn. Corbet, G. B. & Harris, S. (Eds). Blackwell Scientific Publications. Oxford.

Laurie, E. M. O. 1946. The Coypu (*Myocastor coypu*) in Great Britain. J. Anim. Ecol. 15:22-34.

三浦慎吾. 1976. 分布からみたヌートリアの帰化，定着，岡山県の場合. 哺乳動雑，6: 231-237.

Osgood, W. H. 1943. Mammals of Chile. Field Museum Natural History Publications, Zoology Series 30: 131-4.

Willner, G. R., Chapman, J. A. & Pursley, D. 1979. Reproduction, physiological responses, food habits, and abundance of nutria on Maryland marshes. Wildl. Monogr. 65:1-43.